

幼稚園実習で学生が得たもの

－実習に向けての取り組み方－

What the students gained from the kindergarten practice

－How to prepare for practical training－

説田 ひとみ

Hitomi Setta

〈摘 要〉

本研究は、学生の幼稚園教育実習を通して実習園での人間関係、子どもとの関わりの中で培ったこと、保育者としての魅力を感じたこと、実習生として困ったことなどをアンケート・聞き取り調査によって、保育の難しさの要因は何かについて考察する。また、保育の難しさから学び得た学生の変化や保育者になりたいと思った要因について考察する。

〈キーワード〉幼稚園教育実習 観察 保育者 健康管理 日誌

はじめに

保育者養成校は、保育の質の向上として、現場で活躍できる保育者を養成することが求められている。学生は、幼児期が人格形成の基礎であることは、理解しているものの、実際に幼稚園教育実習を体験すると、大変な仕事であることを実感する。本研究は、保育者養成校で学ぶ学生が初めて幼稚園教育実習を行い、保育現場でのリアリティ・ショックから、2回目の後期幼稚園実習をどのように実施すれば、保育者としての気持ちを高められるかについて考察を行った。

本学の子ども学科では、幼保コース・幼少コースに分かれていて、幼稚園教員養成課程認定及び保育士養成課程認定を受け、幼稚園教諭二種免許・保育資格の両免許の習得、または幼稚園教諭二種免許・小学校教諭二種免許の取得を目指している。

2年次に、通年授業として幼稚園教育実習事前事後の授業があり、幼稚園教育実習（前期）は、5月下旬から2週間（10日間）・幼稚園教育実習（後期）10月下旬から2週間（10日間）となっている。

I 指導状況

実習授業の時間構成は、2 年次通年で実習事前事後（実習指導）を行う。この授業で、幼稚園教育要領の理解、実習に向けての心構え、幼稚園生活での 1 日の流れ、保育者の仕事と役割、実習生としての配慮事項、実習のための手遊び、記録のとり方・実習日誌のかき方等を主に講義・演習を行い、学生は 5 月下旬に幼稚園教育実習を実施する。実習後は振り返りを行い、後期の幼稚園教育実習に向けて実習日誌の書き方、保育者の仕事と役割、実技（手遊び、絵本の読み方、紙芝居の読み方、実習日誌の書き方、指導案野書き方等）を見直し、10 月下旬に後期の幼稚園教育実習を実施する。

II 目的

国が求めていることとして「保育者の資質向上・自ら学ぶ保育者」専門性・養成段階における課題として基本的視点から幼児理解に基づき、遊びを通して総合的に指導が行える保育者を養成しなければならない。学生自身に多様な経験をさせ、得意分野の素地の形成、実践力の育成、保育者養成のための環境を整えていく必要がある。実習前の事前の授業では学生の実践力育成を中心とする。実習後は学生の振り返りを調査し、実態を把握した上で、実際の現場で保育者が子どもに対してどのような援助を行い、どのようなことを大切にしているかを観察する。実習園では実習生に対してどのようなことが求められ、どのような指摘を受けたかを省察することで、現場に適した保育者としての資質向上に繋げていくために、総合的な幼稚園教育実習事前事後の授業とはどのような授業でなければならないのかを考察する。

本研究は、幼稚園教育実習後の振り返りとして、アンケート・聞き取り調査を行って分析し、その結果を今後の授業に取り入れて授業改善を図り、保育者としての資質向上に繋がることを目的とする。

III 調査方法

実習を行った 3 名の学生を対象に半構造化質問紙法を実施した。この 3 名の学生からは、事前に研究を目的に調査を行うことへの承諾を得た。10 日間の実習を振り返り、必要な事を質問や記述式で行い構成した。分からないことについては聞き取りを行った。

1. 「幼稚園実習を終えて」健康状態はどうでしたか

	前 期 実 習	後 期 実 習
N	風邪をひき熱が出たため 1 日欠席	前期のことを考え、実習前から体調を整えて実習に臨んだ。
K	風邪をひき熱が出たため 2 日欠席	前期の実習で欠席したので、後期は欠席しないように体調を整えたが、1 日熱が出て欠席。
M	風邪をひき熱が出たため 1 日欠席	前期の実習で欠席したため、後期は 1 日も休まないように、実習に入る 2 週間前から体調を整えたことで、10 日間の実習を欠席なく行えた。

考察

前期の実習に入る前に、健康管理は自己管理であることを伝え、学生に指導してきた。実際には、実習に行き体調を崩し、実習を欠席した学生も体調を崩すとは思ってもみなかったと聞き取りの中で答えた。10 日間の実習を経験し健康にやり遂げていく事がどんなに大切であるかを感じたとともに、健康でなければ子どもたちや先生方と上手に関われないことも実感した。また、新しい環境に対し極度の緊張感や毎日の実習記録の提出のため、夜遅くまで日誌を書く時間にとられ、睡眠不足が原因で体調を崩したことも分かった。健康管理は前期の実習で知る大きな要素である。学生は前期の振り返りから後期に向け、健康管理は自己管理であることを認識した上で、対策を立て体調を整え体力作りに心掛け、2 週間前から早寝早起きを行い、後期の実習に臨んでいた。1 名は欠席をしたが、体力や体調に心掛けることで後期の実習が前期に比べ、スムーズに終える事ができたと答えている。学生自身の心掛けにより 10 日間の実習は健康で臨むことが大切であることを実感したことは、良い経験になったと言える。

2. 勤務の状況

	N	K	M
出勤時間	7:50～	7:30～	7:20～
職員朝礼	実習は無し（園児と関わる）	7:45～	8:15～
降園時間	14:00	14:00	14:20 実習生は園児の降園後掃除を行う
清掃時間	14:30～（預かり保育）	15:00～15:30	
反省会		15:30	16:15～
休憩（休息）	45 分	無し	休憩を含めて反省会
職員終礼	実習生は無し	16:00～反省及び明日の準備	17:00
終了時間	17:00	17:00	17:15

幼稚園実習は、2 か園が早朝からの出勤で休憩時間がほとんどない状況で実習を行っている。N の園では 45 分の休憩が確保されていた。早朝からの実習は大変だと感じている学生が殆どである。余裕をもって実習を行うためにも、実習事前学習を充実したものにしていく必要がある。実習園側にも休憩（休息）時間に協力をお願いすることを視野に入れて検討していくことも 1 つの方法であると考えられる。

3. 子どもたちの名前を全員覚えたか。

	前 期	後 期
N	子どもの名前を覚えるのに、2、3日かかった。名前の覚え方としては、座席の位置を把握して机の名前シールや壁面の誕生表で覚えた。	名前の覚え方は、前期と同じではあったが、前期とは違いスムーズに覚えられた。 名前を呼ぶことで、子ども達が嬉しい笑顔で関わってくれるのを感じた。
K	1週間ごとにクラスが違い、名前を覚えられなかった。	積極的に子ども達の名前を呼ぶことによって名前を覚えた。
M	名前を事前に把握しておかなかったため、初日に名前で呼ぶことができなかった。	前期の実習を反省して、後期については初日から名前を呼ぶことができた。名前を覚えたことでクラス全員と関わることができた。

一人ひとりの名前を呼ぶことは、子どもたちとの信頼関係を作っていくための第一歩と考えている。前期の反省から、できるだけ早く名前を覚えようと指導している。名前を呼ぶことでクラス全員の子供もと関わることができたと感じている。子どもたちも名前を呼ばれることで、安心して実習生と関わっていることを実感している。この点において相互的に良い関係づくりとなる事が示される。名前を呼ぶことは一人ひとりを尊重し大切に関わることであり、子どもたちが自己肯定感をもって生活していく事にも繋がっていることを実感できたと聞き取り調査でも答えている。

4. 実習日誌について

	前 期	後 期
N	初めの実習で書くのに慣れず、学校からの資料や自分で購入した本を参考に書くことで睡眠時間が確保できなかった。書くことに慣れたら、ある程度の睡眠時間の確保ができた。	3日間は前期と同じ日誌のかき方ではあったが、4日目以降はエピソード記録の形態での記入は、学校の指導も受けていないため苦戦した。前期よりも時間がかかり大変ではあったが、エピソード記録を書くことで、普段より子ども達の言動を注意して観察することで、子ども達の言動の意図をより考えるようになった。
K	どのように書けば良いか分からなかった。授業でやったものより、先輩の書いた記録の方が流れや時間、書き方が具体的で分かり易かった。園から記録用紙1枚で記入するよう指導を受けた。保育者の言葉掛けの意図が分からず、慣れるまで大変であった。	日誌のかき方に慣れ、保育者の言葉掛けの意図をくみ取ることができた。 保育者の意図が分からないときは、反省会の時に質問することができた。 日誌を書くことで見守ることの大切さを学んだ。
M	1日目は、何もかも初めてのことで実習中のメモ書きも家に帰ると殆どわからず、思い出すのに時間がかかり、次の日からはメモの取り方を意識してとるようにすることで書くことができた。援助、配慮の内容を短く分かりやすく書くことができなかった。	後期についても、同じように文章の書き方の注意を受け、文章を書く努力の必要性を感じた。今後、文章を書く練習をしていく必要を感じている。

実習日誌の記入については、実習事前事後の授業で実習を実施しているが、実習先で指導を受けないと記入できない状況である。授業の中で実習日誌の書き方や指導計画の書き方について理解できていないことが分かる。実習先での負担のみならず、学生自身にも負

担になっていることが明確になった。また、子どもたちと直接関わることで子どもの見方や理解することを学んでいることも明らかになった。前期での学びは大きく、実習後期での事前学習の取り組む意識の変化が顕著に表れた。後期では、前期の経験を活かして後期実習に向け授業中に記録を交換し、意見交換を行いながら良い記録にしたい気持ちが高まった。学生同士が互いの記録を基に学び合うことは、自分の欠点にも気づくことになり、座学以上に学生の意識を高め、質の向上に繋がったと感じた。こうした機会を持つことによって学習意欲を強く持ち、後期の目標を具体的にすることができた。また、学生たちが保育者から認められることは、意欲的に実習を行おうとする気持ちとなり保育の質が高まる。

指導者が一方的な授業を行うのではなく、学生が互いに学び合える授業を大切にする。さらに、前期実習事前授業において実習日誌の書き方の指導を授業内で行い、学生たちが十分に理解をすれば、余裕を持って実習に臨むことになる。そうすると、学生の睡眠を確保することに繋がり、健康を持続的に維持できる。よって授業体制の検討が必要となる。国が求めている保育の質についても同様に、実習で学ぶための学生の意識・態度を育てることが求められていると感じた。

5. 部分実習について

	前 期	後 期
N	「フルーツバスケット」、製作「傘」をテーマに行った。事前に何度も練習を重ね、何度も訂正しながら行ったが、予想していた子どもの動きがつかめず、予想以上に早く終了してしまった。事前に準備をしておくべきであった。	「音楽に合わせて表現遊び」を行った。思っていたように子どもが動いてくれず、手本が必要であったと反省した。ピアノに合わせての動きは、子ども達の感性によって引き出されたものがあり、楽しく終了することができた。 責任実習で「ミノムシけん玉」の製作をした。導入にミノムシの写真を見せイメージを膨らませる事でスムーズに行えた。見通しの甘さから早く終了した子ども、出来上がったけん玉がカップの中に入らない子が随分いた等、紐の位置の工夫も必要であると指導を受けた。
K	1回目の「絵本」は、初めてのことで緊張して、子ども達を上手くまとめることができなかった。2回目の「紙芝居」は、反省とアドバイスを活かし、手遊びは自分が楽しそうにできるものを選んだ。読み方、話し方に抑揚をつけ2回目は子ども達も楽しんでいた。	1日実習で「歌唱指導」を行った。初めての歌唱指導は何度も練習を重ねて行ったが、上手いかず子ども達は、喧嘩を始めて泣き出す子への対応に苦戦し、歌を覚える事に集中して楽しく歌う事が考えられなかった。次回は楽しく歌えるように指導したい。「フルーツバスケット」では、ゲーム展開は上手くいっていたがフルーツのメダルが破損するなど予想外の事が起こった。想定外の事にも対応できるようにしておく良かった。
M	初めての部分実習で「製作」の流れがつかめず時間通り行えなかった。また、子どもを待たせる事も多く、クラス全体で楽しむ時間にならなかった。	前期の反省を活かして、責任実習の計画案をイメージトレーニングして何度も繰り返し行い、時間の流れを確認した事で上手くでき、担当の先生以外にも褒めて頂き自信が持てた。

3名の共通点は、前期を振り返り、前期実習のような失敗にならないことを意識して後期に臨んでいることが分かる。「子ども達を待たせてしまった」「楽しくなかった」等の失敗が糧となり、こうした反省から次への目標を達成するために、実習生一人ひとりがイメージして、トレーニングを行い、達成を感じ「上手くいった」と確認している。実習を円滑に行うために、実習前までに様々な保育場面を想定して、事前に準備がどれくらい必要なのかを理解した学生は、積極的に取り組むことができた。また、事前の準備を万全に行っても、見通しの甘さに気づくことができた。体験しなければわからないことを実習で行い、学生自身が学びを通して成長していくことを感じられるように指導していくことも大切であると感じる。指導の在り方としては、学生が自ら取り組めるような指導の在り方が改めて必要だと思った。

6. 保育者としてやりがいを感じたか。

	前 期	後 期
N	年長児がクラスで毎日、マーチングを練習する時に、実習生も指導者として子ども達に振りや流れを知らせた。毎日少しずつ形になっていく子ども達の頑張る姿をみた時やりがいを感じた。	年少組担当で、衣服の畳み方を教えながら一緒に畳むと次の日から自分で畳もうとしていたのを見て、子ども達の成長を感じた時にやりがいを感じた。
K	初日全く話してくれなかった子どもがいた。最終日に子どもから話をしてくれた事。小さい子どもの変化や信頼関係を築けていく事に感動したこと。	前期では、身支度が一人でできなかった子が後期では、一人でできるようになっていたり、時計を見て行動できるようになっていたり、子どもたちの成長を身近に感じたこと。頑張って逆上がりをしようとする姿に感動したことが、保育者は素晴らしい職業だと改めて感じる事ができた。
M	担当の先生から唯一褒められたところがあった。給食時間に食べる時間を子ども達に知らせると、先生の指示に従って動けた子ども達を見て、担当の先生が子どもたちの成長に気付き、褒めて頂いたときに感動した。	前期から見て子ども達が成長をしたことに感動した。以前は実習生に対し「遊ば」と言って来ていた子ども達が子ども同士で遊びを展開して盛り上がっている姿を見たことや、他にも自分のことは自分で行っている姿を見て、子どもたちの成長に感動した。

実習は普段の学生生活とは違い、保育の観察・実習日誌を書く・指導計画作成・実践といったことが求められ、苦しいことも多々あるなか、子どもたちと関わることで、学生は子ども達の成長を身近で感じる事ができる。学生にとってどんな事も新鮮で心に受けとめることが、保育者になりたいという気持ちと結びついていくのではないかと。

実際の現場で子どもたちと関わるなかで、子どもの成長を目のあたりに見ることができ、子どもと一緒に過ごすことで子どもたちのもつ世界観を感じる事ができた。また、子どもたちと一緒に過ごすことで感性が豊かになり、保育の仕事は楽しくやりがいのあることだと感じたことに繋がったと考えられる。今後の学生指導において、子どもたちと関わる機会を持ち、子どもの変化を学び、子どもたちの成長を実感できる機会を作ることが、学生自身にとって保育者を目指していくために必要なことであるとする。

7. 自己評価について

1) 積極的に行動できたか

	前 期	後 期
N	できた。	できた。
K	積極的に行っていたつもりだがもっと積極にと 言われた。	積極的に行えた。分からないところは保育者に 聞くことができた。
M	できた。	できた。

学生は自己評価の中で、「積極的にできた」と思っているが、担当保育者や周りの保育者には映らないようであった。Kが質問に答えているように、「もっと積極的に」と言われた。初めての場所、初めて会う人たち、初めての保育実習においては目の前のことしか見えず、それども学生は全力で臨んでいることが窺える。心の余裕もなく、自分自身を客観的に見ることも等ができない。また、自分に自信がないことも伝わってくる。今後の課題として実習に余裕を持って、臨んでいけるような授業体制を整えていく必要を感じる。

2) 明るく笑顔で接することができましたか

	前 期	後 期
N	できた。	できた。
K	できたと思う。	できたと思う。
M	できた。	できた。

学生たちは「明るく笑顔で接する」という課題に「できた」と答えている。担当者の先生や巡回指導の先生からは学内での笑顔は見られず、緊張のあまり無表情であったと伺った。学生は精一杯の笑顔で接しているようだが、自分自身が見えていないのが現状である。明るく笑顔という点を考察すると、自分の姿を客観的に捉える余裕がないことが窺える。巡回指導者からも余裕のなさが感じられたと伺っている。「積極的に行動できたか」の質問と同様に、自信がなく余裕がないといえる。

3) 実習記録は毎日提出できましたか

	前 期	後 期
N	できた。	できた。
K	日誌を書き上げたにも拘らず忘れたこともあった。出 せない日もあった。体調を崩して提出できなかった。	指導計画はできてはいたが、清書してい ないために提出できなかった。
M	できた。	できた。

提出できない理由としてKは、時間に余裕がなく睡眠時間を削っても書けなくて提出できなかった。体調を崩して提出できないなどは、実習日誌の書き方に時間がかかり書き慣れていないことや書き方が理解できていないことに繋がっていく。このようなことをな

くしていくためにも、日誌の書き方や指導計画作成の書き方については、最低限習得して臨めるような授業時間の確保が求められる。

4) 職員との関係はどうでしたか

	前 期	後 期
N	先生から指導を受けることが多かった。学びや準備不足があり落ち込んだ。	園の様子も分かり、事前準備を行うことで新たな指導を受けることができた。教わるが多く、先生のような先生になりたいと感じた。
K	余り良くなかった。冷たい印象。	自分から積極的に笑顔で挨拶を行うことで関係が良くなり実習への不安がなくなった。前期と比べ先生から優しく見守ってもらい実習ができ、園の先生と関わり、先生方のような先生を目標にしたいと思った。
M	できない事が多く、自分の仕事としてどのように動いて良いか分からず、戸惑い気付かない実習生と思われ、居場所が無かった。	前期の反省から実習の目的を具体的に示し、実習担当者に受け入れてもらい実習指導をして頂いた。丁寧な指導であり、認めて頂くこともでき自信になった。担当の先生のような保育者になりたいと思った。

前期実習に向け、一通り準備して臨むが、分からないことが何かが分からないため、保育者に質問もできないで立ち尽くしている。実習に対しての意欲が見られず、自信のなさが評価されている。このことについては、事前学習の授業にも見られた。学生は、「これくらい準備しておけば多分大丈夫、実習は10日間だけだから」という安易な気持ちで実習に臨んでいる。実際に実習を体験して、自分自身の考えの甘さを感じたと述べている。授業でもっとやっておけば良かったと反省もしている等と聞き取り調査から分かる。できないことがあれば自信をなくし、自信をなくせば自分の行動に責任が持てず消極的な態度や行動となり、笑顔で職員に接することができない。意欲のない実習生に対し、実習園職員は快く実習指導することへと繋がっていかないこともアンケートから分かった。また、自信がない事が原因で、実習生は積極的に行動し笑顔で子ども達や実習園職員に接することができないことに気付いていないことも分かった。前期実習で、実習園の先生たちは怖い・冷たいといった印象を持ち良い関係性を持てないと感じられたのではないと思われる。前期の自己評価に共通して言えることは、実習に対して意欲的に臨む態度や自信のない行動等が大きく影響を及ぼすと考えられる。

後期実習での共通点は、園の先生から自分を認めてもらったことで、実習園の先生のような保育者になりたいと学生3名ともが言っている。今後の課題としては、実習先に快く受け入れてもらえる実習態度を養うことが求められていることが明らかになった。実習事前の授業時間を確保し、実習に向けて細かな指導を繰り返し行い、実習に向けての準備や社会的マナーを身に付け実習先に送り出すことで、学生たちは余裕を持って実習に臨むことができる。また、心に余裕が持てるような実習日誌の書き方や指導計画の作成の仕方を学び、自信を持って実習に臨むことにより、理解してることにに対し指導を受けることで質

の向上に繋がり、実習園側が快く実習生を受け入れる条件になると考えられる。

8. 子どもから学んだこと

	前 期	後 期
N	5歳児になると、保育者に任されたりや褒められたりすると嬉しそうに頑張る様子が見られた。その相手が自分の信頼できる相手であれば困難なことも最後までやり遂げる気持ちが引き出せることを学んだ。	3歳児から友だちのことを意識して「○○よりも早く終わった」等誰かと比べたり、友だちに玩具を取られて泣いた際に、自分が使いたいのに我慢して貸してたりして友だちへの思いやる気持ちがあると感じた。玩具のやり取りで揉めていたとしても、しばらく見守ることの大切さを学んだ。
K	ピアノが苦手で弾けずにいた私に「先生頑張れ!」と応援してくれる姿や友だちの逆上がりを応援する姿、逆上がりができた時、自分のことのように喜び合う子どもたちを見て、相手のことを思う気持ちは大切だと気付いた。また、小さい生き物に触れ、「おうちはどこだろう?」と言っている姿を見て、そう言う考え方もあるんだと気付いた。	困っている子の手伝いをする、頼られたい存在として、成長していく姿や自分が少しずつ成長している様子を見て感じる事ができた。
M	子どもは、先生を信頼していないと、すねたり、怒ったりと沢山の表情・感情を出すことができないと感じた。	5歳児は、何事も諦めずに最後まで取り組むことができるということを学ぶことができた。

子どもたちと実際に関わることで、子どもの気持ちに慣れたり、子どものふとした言葉に気付いたりして子どもの気持ちを理解することができた。また、子どもは可愛いだけにとどまらず、成長していくことの喜びや最後までやり遂げようとする子どもの頑張りにも感動している。これらについては、実習でしか得られない貴重な体験であることに学生たちは気づき、子どもたちから学んだことであると述べている。

9. 保育者から学んだこと

	前 期	後 期
N	活動の展開には、メリハリを付け行う事が大切。活動の最後のまとめができず、だらだらと終了したことで、子どもたちを戸惑わせてしまったことを、担当の先生の進め方を観て学ぶことができた。	子どもたちの発達や現在の子どもの姿から何に興味があり、どんなことができるかを考える大切さを学んだ。
K	子ども一人ひとりの成長や発達に合わせた声掛けの仕方や対応を変えることの大切さを学びました。子どもが自発的に行動できる声掛けをしなければいけないことを学んだ。	子どもたちが自ら学べる環境の準備の大切さを学びました。 子ども達を引き付ける話し方の大切さを学んだ。
M	子どもたち自ら多くのことを経験するための保育者の言葉がけの抑揚の在り方で、子どもの真剣さが変わって行くことを学んだ。一つのことにに関わりながら、周りの様子をしっかりと把握しなければならないことを学んだ。	劇遊びを行う時など、担当の先生が一人で進めていかなくてはならない大変さを学んだ。活動の展開がだらだらしないように、保育者は常にメリハリを付けながら子どもたちが楽しい活動ができるようにしなければいけないことを学んだ。

保育者からの学びは貴重であり、保育者の言葉掛けに注目している。保育者の言葉掛けで子ども達のやる気や自信に繋がることを学んだことが分かる。人的環境の一つとして保育者の存在があることを理解したことは、今後保育者の役割や子どもとの関わりに大きな影響を感じられると考察する。

この実習で、学生は大きく成長したと考えられる。また、担当保育者や指導を受けた先生、関わった保育者の方々の保育を観察して学んだことは、目標とする保育者像にも繋がった。

10. 今後の課題について

	前 期	後 期
N	活動と活動の間の時間を任せられた時、同じような手遊びしか出来なかったことから、レパートリーを増やしておくこと。子どもたちが主体的に取り組めるように、直接的な声掛けでなく行動を促すような声掛けができるようにすること。その時の状況に応じた声掛けや行動ができるように様々な状況を予め予想して声掛けができるようにする。	自分が提供する遊びについて深めておくこと。子どもたちのことをより広い視野でみること。声に抑揚を付け、何が伝えたいかの視点を前もって考えておくこと。子どもたちが何に興味・関心を示しているのかを観察し子どもたちを引き付け意欲的に活動が取り組めるようにしたいこと。子どもたちの言動の意図を考え、自分はどの様に動くか判断できる判断力を身に付ける。
K	ピアノ練習。手遊びのレパートリーを増やす。	視野を広くして子どもたちを見守り待つこと。ピアノ練習。子どもを引き付ける話し方。
M	ピアノを完璧に弾くこと。一日の流れを初日で覚えること。責任実習での製作活動や集団遊び等の活動は何度もイメージトレーニングを行う。	指導計画の教師の援助・配慮等を端的に記入する。ピアノで速いテンポに合わせて弾けるようにする。

前期の実習での振り返りが後期に向けての課題となり、後期の実習では、前期で経験した園での雰囲気があったため具体的にイメージすることができ、目標が立てやすくなった。そのため実習に向かう気持ちが事前学習の授業からも窺えた。授業の中で、環境を通しての遊びから子どもの主体性・自主性を伸ばす保育が求められている。学生自身が環境を経験して学んだことから、具体的に・子どもの姿を捉えて、どのような活動を展開していくのか。それを授業案として作成することは、今後の課題として出てきている。

学生は、苦しいこともあるが保育者を目指すためにどのような学びが必要かを学生自身で感じ、3年次での保育園実習に繋げようと努力している。

まとめ

本研究では、学生が実習後の振り返りを行い、感じたことや学んだことをアンケート調査・聞き取り調査から明らかとなった。それらを分析することにより、実習指導のあり方を探り、保育者養成校における幼稚園教諭の資質向上を目指すことを目的にしたものである。

今回の調査のなかで、前期の保育実習は学生気分の実習に行き、自己評価と同様に実習園からも評価は低かった。前期で指摘を受けたことや指導して頂いたことは、後期実習に

向け前向きに取り組むべき良いきっかけとなった。その結果、後期実習では良き評価に繋がり、保育者を目指す気持ちが持てたことは大きく評価できる。課題として残されることは前期の事前学習のあり方である。今回のように前期の実習に臨む姿勢は、「何とかなる」という気持ちであったことを反省し、準備を整えて実習に臨んでいける気持ちを持たせていく必要がある。

学生が実際に困難と感じていることは、アンケート調査・聞き取り調査を通して明らかにするとともに、その困難さをもたらしている要因となっている。

実習で実習園に於いて日誌の書き方を教えて頂いている。このことは実習前に授業時間内にも行っていたが、学生には身に付いていない。実習のための事前訪問で与えられた課題について準備を行っていないことなどが挙げられる。学生には実習をさせてもらうという気持ちが育っていないことから、実習を行う事前学習時間の不足が要因となっていると考えられる。後期実習において「保育者は素晴らしい仕事で魅力を感じている」という要素には、担当の先生に褒められた、認めてもらったという経験をすることで自信となっていることが分かる。よって、実習に行く事前授業で余裕の持てる授業にすることが求められる。これらを含めて幼稚園教育実習事前学習のあり方を考察するべきである。したがって、幼稚園教育実習事前授業として、2年次5月での幼稚園実習を実施するためには、実習事前授業を1年次後期の授業で行うことが望ましいと考えられる。余裕を持って実習事前の時間を確保することで、日誌の書き方の充実を図る事・実技指導案立案（手遊び・絵本の読み聞かせ・製作・集団遊び）・社会人としてのマナーを身に付けることができるのではないか。また、現場は幼い命を預かる教育の場であることを理解したうえで、自分自身の健康をしっかり管理し、子どもの発達への理解とすすめ、保育者としての役割をしっかりと把握し、知識を実践できるように学び力を身に付けることが必要である。実技を実践に活かすためには、その場の状況を把握し、それを応用する力、その日の振り返りをするための観察力をつけることも必要である。さらに実習に臨む姿勢が大切であることを今後の指導の課題にして本来の幼稚園実習の目的を達成できるように努めていくことが保育者としての質の向上に繋がると考える。

【引用・参考文献】

- 1) 教育実習 - TAMAGAWA (2019年8月29日閲覧)
www.tamagawa.ac.jp/student_...
- 2) 「幼稚園教育実習」責任実習における「制作」の事前指導に (2019年8月29日閲覧)
www.sai-junshin.ac.jp/junsh...
- 3) 研究論文 幼稚園実習における実習園評価の開示と 実習自己評価 (2019年8月29日閲覧)
www.blog.crn.or.jp/kodomoga...
- 4) 幼稚園教育実習直後における学生の実習に対する自己調整学習 (2019年11月5日閲覧)
www.blog.crn.or.jp/kodomoga...
- 5) 教育実習レポート (幼稚園) - Osaka Seikei College (2019年11月5日閲覧)
osaka-seikei.jp/_files/u_ne...